

# 参禅が補填した「一つの有機体」

## 『門』論

大場 黎亜

### はじめに

夏目漱石の『門』における宗助・御米の夫婦について、谷崎潤一郎は「信仰の対象なく、道徳の根拠なく、荒れずさんだ現実の中に住する今日の我々が幸福に生きる唯一の道は、まことの道は、まことの恋によって永劫に結合した夫婦の愛情の中に第一義の生活を営むにある、これが『門』の作者の我々に教ふる所である<sup>1)</sup>」と書いている。これを受けた江藤淳は「これ以外に『門』の正当な読み方はない<sup>2)</sup>」とまで述べたように、『門』では夫婦の強い結び付きを読むものがあつた。しかし、西垣勤は御米が子供の出来ないことを宗助に打ち明ける場面の宗助の反応等を例にして「二人の間の裂け目は明らか<sup>3)</sup>」であると指摘した。それ以降、

野中夫妻は「山の手の奥」に追いやられた生活を送っているのだと指摘した前田愛<sup>4)</sup>、夫婦間のディスコミュニケーションを指摘した上で、隠蔽された男女の関係、抑圧された御米の表現されない領域の問題などに着目した中山和子<sup>5)</sup>など、愛が破綻した小説と読む論が多くみられるようになった。

このような対照的な評価が生じる理由の一つとして、作中で野中夫妻を表現する際に使われたキーワードについて考えたい。「一つの有機体」(十四の二)という表現の解釈の問題があるのではないだろうか。そして「一つの有機体」のように読める野中夫妻について、次の二つの観点からテクストを読み直すことで、この相反する評価が生じた理由について考えたい。一つ目は、「一つの有機体」という言葉

自体は語り手の言葉であるということであり、二つ目は、野中夫妻の実態が「一つの有機体」のように営まれていたのかどうかという観点である。

後者を明らかにしていくために、本論においては宗助・御米それぞれの〈罪〉と〈罰〉について注目した。野中夫妻は友人・安井を裏切ったという共通の〈罪〉を背負って生活していた。「二つの有機体」自体は語り手の言葉であったにせよ、その〈罪〉のもとで日常を過ごすためには、彼らがそれに伴い受ける〈罰〉を受け止め、〈罪〉のもとで生きていくのだという認識を持ち続ける道しかなかったことは事実であった。しかし、彼らには共通の〈罪〉を持ちながらも、それぞれが受けた〈罰〉が異なったために、そしてそれが各々にしか分かりにくい〈罰〉であったために、一方が〈罪〉を意識する出来事をもう一方がそう認識しないという現象が生じることとなる。このことが、夫婦揃って抱き続けるものとしてあったはずの〈罪〉への意識を歪める結果を産んだのではないだろうか。

夫婦間に歪みを生じさせたとする決定的な要因は、宗助が一人参禅に向う場面から見受けられるとする先行研究の

指摘は多い。確かにこの場面は、宗助と御米が安井の出現について情報を共有しておらず、宗助が一人不安を抱えていることよって共にその展開を乗り越えることが出来ないという結末の脆さを見せている。また、この参禅の展開自体についても様々な指摘がある。

小宮豊隆は宗助の参禅の展開への運び方について、次のように指摘している。

既に状線が一つでも二つでも、ともかく張られてゐる以上、漱石はただ、もつと腰を据ゑて、『門』を長く書き続ける覚悟を立て、根気よく状線を張る機会を窺ひ、また根気よく事件の発展を待つてゐさへすればよかつた。<sup>16</sup>

小宮は、漱石はそれを分かっていただろうとするが、展開を急いだと指摘しており、その理由は漱石の体調不良のせいだろうと推測している。もつとじつくりと終盤に向えば、安井の出現も宗助の参禅も必然的なものとして分かるものになっただろうと言うのだ。逆に言えば、小宮はこの

展開について「宗助の参禅が必然だった」とするためには物足りないという評価をしていることになる。正宗白鳥も「宗助が正体を現してからの心理も一通り書いてあるには違ひないが、真に迫ったところはなかつた。鎌倉の禅寺へ行くなんか少し巫山戯てゐる」と評している。また、柄谷行人は「それまでの問題を放り出しておいて、「悟り」も何もあつたものではない。これはこの作品の欠如とされており、その理由として、漱石の肉体的衰弱があげられ、また、『門』という題名に落をつけるためにそうしたとも考えられている」と指摘した。

しかし、漱石はそのように体調不良だけを理由に展開を急いだらうか。あるいは、この展開は作品として評価に値しないものだらうか。近年の『門』論の中には、宗助の参禅に意味を見出しているものもあるが、「安井からの逃避」「日常からの逃避」と比較的単純に捉えられてきているものが多い。本論では作品における参禅の展開の意味を野中夫妻の「一つの有機体」の内実から導き出すことを試みる。そのことによつて、宗助の参禅が、意識の上では御米と安井の出現を共有出来ずに安井や現実からの逃避になつ

ていたとしても、その結果として、改めて御米と〈罪〉を背負つて生きていこうとすることに繋がっていることを評価したい。

なお、テキストの引用は『漱石全集 第六卷』（岩波書店、一九九四・五）を使用した。適宜、旧字を新字に改め、ルビを省略してある。

#### 一 語られている「一つの有機体」とその実態

野中夫妻は、安井を裏切つたという共通の〈罪〉を抱えている。そして、その〈罪〉によつて各々が〈罰〉を受けながら生活している。同じ〈罪〉から生じる〈罰〉だが、その内実は各々異なる。宗助は世間から疎外され、長男として受け継ぐべき財産を失い、昔の自分に似ている小六や、裕福な家主の坂井とのかかわりの中で、過去の自分や未来になり得た自分との乖離を思い知らされるといふ〈罰〉を受けている。御米は易者に言われた「貴方は人に対して済まない事をした覚がある。其罪が崇つてゐるから、子供は決して育たない」（十三の八）と言われたことによつて、子

どもが得られないことが安井への裏切りから生じた〈罰〉だと意識している。

両者の〈罰〉は、彼らが共有すべき〈罰〉だと考える。ここでの共有とは、体験としては別々だとしても、同じ罪から派生する〈罰〉なのだということを共に認識するとう意味である。つまり、安井を裏切った〈罪〉が、それぞれに〈罰〉を与え続け、野中夫妻がその〈罰〉によつて常に〈罪〉の下に生きていることを意識していることが「一つの有機体」のように生活するために必要なのだ。

しかしここで注意すべきなのが、「一つの有機体」とは、語り手の言葉であることと、野中夫妻が「一つの有機体」のような生き方を意識して出来ているかどうかということである。まず、野中夫妻が「一つの有機体」と語られる一節を確認したい。

彼等が毎日同じ判を同じ胸に押し、長の月日を倦ま  
ず渡つて来たのは、彼等が始から一般の社会に興味を失  
つてゐたためではなかつた。社会の方で彼等を二人ぎり  
に切り詰めて、其二人に冷かな背を向けた結果に外なら

なかつた。外に向つて生長する余地を見出し得なかつた  
二人は、内に向つて深く延び始めたのである。(中略) け  
れども互から云へば、道義上切り離す事の出来ない「一  
つの有機体」になつた。(十四の二)(傍線部論者)

宗助と御米が夫婦となつたのは、「大風は突然不用意の  
二人を吹き倒した」(十四の十)という「不用意」の状態での  
突然の出来事によるものであつた。その結果、二人の意  
思よりも社会からの強制的な力によつて、お互いだけを頼  
りに生きざるを得なくなつたのだ。語り手が語る「一つの  
有機体」とは、宗助と御米が意識してそのように生きてい  
くことを選んだということではなく、彼らにとつてはどう  
足掻こうとも、「一つの有機体」のように生きていくことし  
か道は与えられていないということなのである。

中山和子はこの「一つの有機体」の表現について、以下  
のように述べている。

『門』の男女は周知の「一つの有機体」という夫婦神  
話にくるまれている。「二人の精神を組み立てる神経系

は、最後の織維に至る迄、互に抱き合つて出来上つてゐた」(十四)というその美事な同一化を物語る語り手の解釈が、読解の方向をリードするのである。『門』のサワリともいふべきそれら解釈的言説が、つねに「二人」「彼等」「夫婦」など複数において語り出されるのは注意しよ。よい。

しかし「一つの有機体」の内実に注目してみると、必ずしも語り手の語る通りの夫婦ではないように見受けられる。山岡正和も「語り」自身が物語言説からコードを引き出し、夫婦の円環的な日常に統一的な意味づけを行つていゝのだが、この行為自体が逆にテキストに様々な雑音<sup>ノイズ</sup>を散在させてしまふことになる」と指摘している。彼らの日常会話や様子に着目すると、一見支え合い分かち合つていゝように見えて、夫婦のものごとの受け止め方に齟齬が見受けられる。

御米が時として、

「其内には又きつと好い事があつてよ。さうく悪い

事ばかり続くものぢやないから」と夫を慰さめる様に云ふ事があつた。すると、宗助にはそれが、真心ある妻の口を借りて、自分を翻弄する運命の毒舌の如くに感ぜられた。宗助はさう云ふ場合には何にも答へずにたゞ苦笑するだけであつた。御米が夫でも気が付かずに、なにか云ひ続けると、

「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間ぢやないか」と思い切つて投げ出して仕舞ふ。細君は漸く気が付いて口を噤んで仕舞ふ。

(中略)

彼等は自業自得で、彼等の未来を塗抹した。だから歩いてゐる先方には、花やかな色彩を認める事が出来なものと諦らめて、たゞ二人手を携えて行く氣になつた。

(四の五) (傍線部論者)

「抱き合つて暖を取る様な具合に、御互同志を頼りとして暮らしてゐた」(四の五)はずの二人が、本人同士がそのつもりでいたとしても、御米のことを「自分を翻弄する運命の毒舌の如くに感」じてしまふ宗助の様子と、「夫でも

気が付か」なくて「漸く気が付く」といった御米の様子から、夫婦間の意思相通がスムーズではないことが分かる。そして、必ずしも完成された「一つの有機体」とは言えないような、夫婦間に噛み合わない部分があるという内実を浮かび上がらせる。

片岡豊は、前田愛の指摘を踏まえながらも「こうしてみると、かたやで小六の学費問題を点綴しながら「一種独特のリズム」で「和合同棲」（十三）の姿を語り、そして読者を「理想の夫婦愛の物語」へと引き寄せる語り手の戦略は、見事というほかはない」と述べているが、語り手によるものであるからこそ、宗助と御米のやり取りに注目した際に生じているタイム・ラグ等が気にかかる点であり、「彼等の間にすでに微妙な亀裂が存在していると理解することもあるいは可能かもしれない<sup>1,3</sup>」との見解を示している。

片岡は「可能かもしれない」に留めているが、野中夫妻は過去の裏切りによって社会的に互いの未来に希望が持てないことから、「だから」「諦めて」「二人だけで生きていく（『一つの有機体』として生きていく）「気になった」のである、」「一つの有機体」は諦めの結果、互いがそう生きて行

こうと思いつ込んでいるものだとも考えられるのではないか。そうであるならば、語り手が示したような「一つの有機体」としてしか生きる道のない野中夫妻が、現実にはすでにその道を外れてしまっているのではないかという疑問が生じる。そこで、次に宗助と御米のレベルから、夫婦生活の実態を分析してみよう。

野中夫妻の様子について、語り手は「淋しく睦まじく暮らし」（四の五）、「宗助と御米は仲の好い夫婦に違な」（十四の二）いと語っている。また、「彼等に取つて絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼等にはまた充分であつた」（同）とも語っているが、それはあくまでも「外に向つて生長する余地を見出し得なかつた二人は、内に向つて深く延び」（同）るしかなかつたからである。

しかし、そのような境遇においても、夫婦は「彼等は自然が彼等の前にもたらした恐るべき復讐の下に戦きながら跪びいた。同時に此復讐を受けるために得た互の幸福に對して、愛の神に一弁の香を焚く事を忘れなかつた」（十四の二）のであり、「たゞ其鞭の先に、凡てを癒やす甘い蜜の着いてゐる事を覺つ」（同）ている。必然として陥つた境遇と

はいえ、彼らは安井を裏切った〈罪〉による〈罰〉（Ⅱ「復讐」）を受けつつも、それを受けることによって幸福を得て生活しているということだ。ここでの「幸福」とは、一般的な意味での幸せではなく、ほかならぬこの二人が夫婦として生活を営む上での「幸福」であると論者は捉える。つまり、社会から疎外されるようなことをしてしまった彼ら夫婦の平和な生活のためには、〈罰〉を受けることが必要不可欠なのであり、「此復讐を受けるために得た互の幸福に対して、愛の神に一弁の香を焚く事を忘れなかつた」彼らは、そのことを理解しているのである。

とはいえ、それぞれの〈罰〉が、「一つの有機体」を歪めさせていることは否めない。父との思い出の屏風を手離さなければならぬことについても、安井を裏切った〈罪〉による〈罰〉である以上、宗助は受け止めなければならなかった。しかし、御米にはそれを〈罰〉として共有出来ていなかった。坂井や小六のようになりたいたいと思ってしまうこと、そして坂井との交流の中で〈罰〉の最中にある自分が掴めるわけのない理想に近付こうとしてみようことによつて、〈罪〉意識の揺らぎが生じた。また、御米の身体から

は子供が育たないという〈罰〉を、宗助は告白されるまで全く共有出来ていない。また、告白をされてからも、受け止められていない。夫婦として共通する〈罪〉に対して、それぞれが受けた〈罰〉の場合、互いに共感することが出来ない部分が多く、「御互だけ」では「充分」でない程に追い詰められてしまうのである。

## 二 野中夫妻の「性交」と「成功」

野中夫妻の生活においても一つ注目したいのは、体調の悪い御米に対して宗助の発する「御米、御前子供が出来たんぢやないか」（六の一）という言葉だ。この発言をすることから、彼らが性交を行い続けているのだという事実が浮かび上がってくるだろう。このことについて、浅野洋が赤井恵子との対談で、次のように指摘している。

それも注意深く読んでいくと、二人の間にセックスがあったという意味で書かれたシーンが、確実にあると思えます。非常に明確なのは、例えば第四章ですが、こ

こにはハッキリしているものだけで三ヶ所もの夫婦の就寝シーンが描かれています。その三つめですが、「夫婦はそれぎり話を切り上げて、また床を延べて寝た。夢の上に高い銀河が涼しく懸った。」とあります。単に就寝しただけなら後半の一行は不要なわけで、これは二人の間にあつたという……。というのは、ない時は明確に「ない」と書いているんです。

(中略)

例えば、同じ四章の二例でいいますと、「……と宗助は答えたが、十分ばかりの後夫婦ともすやすや寝入った。」とね。ここではないわけ<sup>15</sup>です。

このように、夫婦の間に性交の事実があるとすれば、彼らにどのような問題が見受けられるだろうか。宗助が、御米に子供が出来たのではないかと聞く様子や、御米が三度妊娠していることから、以前から性交を続けていることは想定出来る。

岡庭昇は、彼らの抱える「不安」が彼らを一層官能的にさせていると指摘している。

何よりも重要なのは、いかなる意味でも極限状況ではないこの作品の風景が、にもかかわらず濃密に湛えている不安ではないだろうか。この不安は、ほとんど官能的でさえある。

(中略)

宗助とお米は、過去から見る原罪感と、市民社会からの逸脱の意識によって、露出した肉体存在であることよって、彼らは、みずからが露出した肉体存在であることよって、周囲の事物を「ものそれ自体」へ、変形させてゆく。「現実らしさ」がひとつひとつ消滅してゆく。代りに、ものの異様にパセティックな相貌が、浮かびあがってくるのだ。

(中略)

危機の意識が、つねに心理や感情や不安などの身体性を自覚せしめているゆえに、彼らはいやおうなく肉体的な存在である<sup>16</sup>ほかはない。

岡庭の指摘からは、野中夫妻には過去に安井を裏切った

事実と、それに伴う生活の状態や（罪）の意識によってもたらされた「不安」があるということ、そしてその「不安」が、彼ら結びつけた「露出した肉体」を一層肉体的に意識させるのだということが分かる。

また、すでに先行研究でも論じられているが、宗助が駿河台下で電車降りて並びにある店を色々見た際も、何を見ても彼の興味や購買意欲をそそるものがなかった中で、最終的に風船を迷わず購入していることや、坂井の家で子供の話をする様子に「羨ましく思つ」（九の五）ている宗助からは、子供を欲する願望を持っていることも容易に分かるだろう。それは御米も同じであり、女として、妻として、子供を産むことは社会の中で母としての女性の地位を確立することになる。近代家族において子供の存在が不可欠であったとすれば、一人の女性として子供を産むという一つの仕事を全うすることは、自分の立ち位置を確立することに繋がるのだ。彼らなりの「幸福」を得ながら生活を維持するには、二人の子供が生まれることを強く求めるのではないだろうか。朴裕可は次のように指摘している。

宗助にとつて「子供」とは家庭における「成功」を象徴するものであった。そして、御米にとつての子供とは何よりも「妻」としての義務をまっとうさせてくれる存在として認識されている。だからこそ上記の文章に引き続いて御米は子供が出来ないと言われたことを宗助に告白しながら「貴方に御気の毒で」「謝罪まらう謝罪まらうと思つてゐた」（十三）と言っているのである。

実際宗助にとつても、「成功」と「子供」の関係は非常に重要だったと想定される。なぜならば、柳沢賢二が指摘しているように、宗助が大学を中退してから六年間の心情的変化に、三度の子供の死が大きく影響しているからだ。

柳沢氏は、「今に見ると云ふ氣」―「單なる憎悪の念」―「両方共始から別種類の人間」（七の一）という三段階の宗助の心情の変化に、三度にわたる子供の死の時期を当てはめて分析している。「今に見る」と思っていた広島での生活の中で一人目の子供を失い、前回に引き続き経済的困窮が大きく影響して二度目の子供の死を経験してしまつた福岡では、「憎悪の念」を抱いている。そして東京に移つて三度目の

子供の死によって、「別種類の人間」なのだと思えるようになった。この三段階を踏まえて、柳沢は次のように述べている。

子供の死は御米だけではなく、宗助にとっても重要な意味をもつ経験であった。野中家長男として生まれた宗助には、立身出世と子孫を残すという二つの義務が存在していた。しかし、御米との恋愛事件によって出世の道からは外れてしまうが、子供という存在が未来の希望として彼に残っていた。しかし、それももうまくいわずに三度にわたり子供は死んでしまう。二つの義務を果たせない宗助は〈未来〉を自分から切り離すことで、苦しみを逃れる生活を送るようになったのである。<sup>21</sup>

未来を自分から切り離すことで、「今に見てる」という当初の意気込みはなくなつたが、当初は世間を見返す意志を持っていたのである。今の宗助には、望んではいけない理想の自分像を見ながら生活していかなければならないという〈罰〉があるにせよ、子供が夫婦の間に出来ることで、

宗助にとつても一つの「成功」に繋がるのだ。少なくとも、宗助の御米と共有出来ない〈罰〉による歪みは、子供が出来ることで修復する効果を得るという可能性があったと言つても過言ではないだろう。家庭を安定させることが、世間から切り離された上で社会の中に生き続けるための手段だったのだ。だからこそ、彼らにとつて「一つの有機体」を維持させるためには性交は欠かせないものである。しかし、易者から子供が育たないことが〈罰〉である宣告された後は、御米はこの行為を行う度に、子供を産み、育てることが叶わないことだということを思いながら苦しまなければならなかったはずだ。今までのように宗助に身体を預け、「一つの有機体」維持のためにも性交を重ねながら、ただただ宗助に打ち明けられない苦しみは続く。

そのような御米に残された「一つの有機体」の維持の方法は、その〈罰〉の共有なのである。御米が易者の言葉を受けたことで、子供を死なせた〈罪〉は、子供が育たない〈罰〉へと変換した。そのことによつて、野中家の中で抱えていた〈罪〉は二種類から一種類になつた。そして、打ち明けるまでは御米一人で抱えていた〈罰〉を、打ち明け

ることによって、宗助は「馬鹿気てゐる」（十三の八）と言  
い納得していないにせよ、二人の〈罰〉であることを認識  
したので。宗助に二人の〈罰〉であると打ち明けたことは、  
それ以降御米の体調が回復することや、性交を想起させる  
記述がなくなっていることなどから、御米にとってプラス  
な効果をもたらした可能性があるだろう。女性として、妻  
としての子供を育てたいという望みは絶たれたとしても、  
宗助と共有しながらその〈罰〉を受け止めて二人で生きて  
いく覚悟が出来たということである。

御米の認識している〈罪〉と〈罰〉は、宗助からすれば  
分かりやすいものになった。しかし残る問題として、宗助  
の〈罰〉の共有がある。屏風への思いや坂井との交流、小  
六に見る過去の記憶など、御米が理解出来ない宗助の  
理想と現実における葛藤、そして夫婦の間には子供が育た  
ないのだということ知らされたことで一層深いものとな  
った宗助の〈罰〉について、この夫婦が「幸福」に生活し  
ていくためにどのようなにして「一つの有機体」の歪みを修  
復していくのだろうか。

### 三 野中夫妻にとつての参拝

宗助は坂井の家に自分達の裏切った安井が現れるかも  
しれないということを知りながら、御米に打ち明けること  
が出来ずにいた。一度だけ「一層のこと、万事を御米に打  
ち明けて、共に苦しみを分つて貰はうかと思」（十七の二）  
っており、「御米、御米」と二声呼ん（同）でいる。しか  
し「宗助はとうく言はうとした事を言い切る勇気を失つ  
て、嘘を吐いて胡魔化し」（同）てしまった。さらに、気を  
紛らわそうと宗助から誘つて向つた寄席においても、自分  
は集中出来ないでいることに対して、集中して楽しんでい  
る御米を横に見ながら「宗助は羨やましい人のうちに御米  
迄勘定しなければならなかつた」（十七の三）のだ。宗助が  
御米にも関係のある安井の出現を打ち明けられないことは、  
彼等の「一つの有機体」において非常に深い亀裂を生じさ  
せる出来事になると考えられる。

御米が〈罰〉の共有化を図るべく易者の言葉を宗助に告  
白したことは、結果としてそれまで子どもと〈罪〉の関連  
性が共有できていなかったがために生じた「一つの有機体」

の亀裂に対して、修復を試みたと言ってもよいだろう。しかし、宗助が個人で抱いている「一つの有機体」に亀裂を入れ兼ねないものとは、立身出世の欲を持つことや、坂井や小六を羨む、つまり安井を裏切ったという過去がなかった場合の自分の人生を羨むことである。それは、宗助がそもそも、その〈罪〉に伴う〈罰〉を受けない状況を望んでしまっている、ということを示唆する。〈罪〉を犯した彼らには〈罰〉が必須だということに、宗助はこの点において、御米と共に〈罪〉を背負って生きていく覚悟がない。同時に、宗助がそれを御米に打明けることは、「一つの有機体」のようにしか生きられない夫婦の関係を崩壊させることに繋がるのである。

実際、宗助は「自分の様な弱い男を放り出すには、もつと穏当な手段で沢山ありそうなものだ」と信じてみた（十七の二）が、安井の出現によって、それまで「凡ての創口を癒合するものは時日である」（十七の五）と胸に刻みつけながら生きてきたものが崩れてしまっている。「悉く自己本位になつてゐた。今迄は忍耐で世を渡つて来た。是からは積極的に人生観を作り易へなければならなかつた。（中略）心

の實質が太くなるものでなくては駄目であつた」（同）と思つている。この期に及んで「心の實質が太くなるもの」を求めている宗助の様子からは、少なくとも安井を裏切つてしまつてからの宗助の人生観が決してしっかり覚悟ができたものではなく、自分に言い聞かせていただけのものであつたとも言える。

それに対して御米は、女性の身体として最大の特徴と言つても過言ではない「子を宿し育てる」機会が奪われる〈罰〉を受けたが、それは時日が経とうとも薄れることのない事実として永久に彼られるものである。このようなそれぞれの時間の経過の捉え方からも、これまで〈罪〉の崇る重さへの意識の差が見受けられるだろう。

宗助は、気持ちよさそうに眠っている御米を見て、「ついでに此間迄は、自分の方が好く寝られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされた」（十七の六）ことを思い返す。しかし宗助は、易者の言葉を打ち明けることで落ち付いた御米のように、安井の出現を打ち明ける手段を持たない。そもそも打ち明けられない理由が、自分の背負うべき〈罪〉に対する覚悟や体勢の弱さなのだという御米に対する申し訳

なさとも重なり、一人で向き合う場所を求めざるを得なかったのだ。

そこで宗助が選んだ避難の先が、鎌倉への参禅であった。宗助がその選択をしたことについて、御米は驚きつつも「平生煮え切らない宗助の果断を喜ん」(十八の二)でいる。宗助がしばらく留守にすることは、小六と二人きりで家になくしてはいけない時間が増えるということである。宗助に易者の言葉を打ち明けるまでの御米は、飲酒をして帰ってくる小六に不安を感じて、障子を張り替える際も「相手が小六でなくつて、夫であつたなら」(八の二)と思つているが、ここではしばらく宗助が留守にすることよりも、宗助の「果断を喜」ぶことが出来ている。追い詰められている宗助と比較して、御米が精神的にも安定してきている様子が読み取れるだろう。

宗助が歯医者で見つけた雑誌「成效」<sup>[22]</sup>の読者層からも分かるように、当時立身出世を志すのは男性の問題であり、参禅も主に男性が行うものであった。宗助は安井を裏切つた〈罪〉によつて、立身出世を諦めなければならない立場であつたが、御米のように告白による解決が図れない宗助

は「悟といふ美名に欺かれて、彼の平生に似合はぬ冒険を試みやうと企てた」(十八の五)のだ。御米と共有出来ない苦しみを御米とは共有し得ない環境において自分だけ救い出そうとするこの行為について、光田鮎美はこのように指摘している。

このように、安井出現以後の宗助の内的変化は、それまでの〈運命〉容認の姿勢に内側から動揺を与えられることにより、〈罪〉の内実への懷疑という形で現れているのである。したがつて、この直後に続く十八章が「宗助が一封の紹介状を懐にして山門を入つた。」という一文で始まるのも、多くの評家が言うごとく唐突でも不自然でもない。<sup>[23]</sup>

しかしそこでの体験は、脅威となつて安井が存在する、あるいは〈罪〉や〈罰〉が存在する「世の中」からの逃避を実現させるどころか、それらについての考えを「断ち切るらうと思へば思ふ程、滾々として湧いて出」(十八の五)てくる場所なのである。「心の実質が太く」なるようにと悟り

を求めたはずの参禅で、(罪)の祟りを払拭するための救いを求めてしまっている宗助は、それも叶わず天から下された(罪)と被られる(罰)に対して、己の無力さを痛感するだけなのであつた。その様子は、語り手によって次のように語られている。

彼はたゞ有の儘の彼として宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遥かに無力無能な赤子である。と、更に自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新らしい発見であつた。同時に自尊心を根絶する程の発見であつた。(十八の六)(傍線部論者)

「自尊心を根絶する程」衝撃を受けている宗助からは、逆にそれまでは(罪)の下に生きていながらも「自尊心」を抱いて生きていたことが分かる。鐘を打つた際も「打ちながら、自分は人並に此鐘を撞木で敲くべき権能がないのを知つてゐた。それを人並に鳴らして見る猿の如き己を深く嫌忌」(十九の二)しており、自分を脅かすものに「父母未生以前と、御米と、安井」(十八の七)を挙げている。な

ぜここに御米が加わるのかを考えると、御米に申し訳ない程、自分がその(罪)への認識が脆いものであつたからである。悟れない父母未生以前と、裏切つた安井と、そして「一つの有機体」であるべきはずの御米。どれもが宗助がしっかりと向き合い切れないでいる対象として脅威と化しているのだ。だからこれまで自分の分別を頼りにして生きてきた宗助は「其分別が今は彼に崇つたのを口惜しく思つた」(二十一の二)のである。

安井を裏切つた過去は突然の「大風」であつたにせよ、二人は結婚して、場所を変えながらも共に暮らしてきた。御米とのやり取りや過ごし方も、坂井との交流や小六を引き取る決断も、そして参禅を選んだことも、全て宗助が自ら選択したことであつた。「自分の分別」の結果、坂井の家で安井の出現という危機に陥つた宗助が、またも「自分の分別」で選んだ参禅は、宗助に逃げ場がないことを知らしめる結果へ追いやつたのである。

光田は続けてこのように指摘している。

更に言うならば、この参禅は(罪)と「切放し」た形

ではなく、逆に、〈運命〉の不可逆性でその内実を塗抹された〈罪〉意識を一端宗助から切り離すことにより、〈運命〉の不可逆性という外的な絶対要因から翻つて、自己内面に遡及した〈罪〉意識と深奥で結びついた故の参禅なのである。〈運命〉の絶対性を容認していたそれまでの宗助を考えれば、この参禅の示唆するところは深い。<sup>(24)</sup>

つまり、宗助の自己内面において、外的要因を除いた状態で真つ向から〈罪〉と対面して受け止め切れていなかった〈罪〉の重さを意識内に浮かび上がらせたのが、この参禅なのだ。社会から疎外されるという外的な要因によって〈罪〉を認めて〈罰〉を受けながら生活してきた宗助だが、それまでの「自らの分別」自体が、外的な要因となって〈罪〉の重さを自らに言い聞かせたものになっていた可能性が見えてくるだろう。

宗助が過去に犯した裏切りと、御米と「一つの有機体」のように生きていく運命とをきちんと認識して受け止めながら生きていくとすれば、宗助は立身出世や坂井・小六な

どへの憧れを一切捨てていく覚悟をした上で、御米と共に、子供を持ってないという〈罰〉を共有して生きていくしかなかったのだ。「彼は門を通る人ではなかった。又門を通らないうで済む人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった」(二十一の二)とあるように、参禅することで〈罪〉や〈罰〉との関係が変わるわけでもなく、何もしないでいても進展が起るわけでもなく、ただ耐えながら慎ましやかな「幸福」のみをあたためていくしかない運命に在るのだということである。宗助が、安井を裏切った〈罪〉から逃避してきた参禅において悟ることは、不可能だったのだ。

御米の元へ帰った宗助は、「御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空気を風で払った様な心持がした」(二十二の二)であり、元の宗助に戻った。そして参禅の後味としては「是に似た不安は是から先何度でも、色々な程度に於て、繰り返さなければ済まない様な虫の知らせが何処かにあつた。それを繰り返させるのは天の事であつた。それを逃げて回るのは宗助の事であつた」(二十二の三)と感している。

宗助は参禅を経て、今後も今回のような〈罪〉の祟りに直

面することが起ろうとも、天がそれを繰り返す限り、逃げ回りつつも御米とこの生き方を続けるしかないと思えることが出来たのである。

### おわりに

参禅の結果として、帰ってきた宗助にはいくつかわの変化が見受けられるようになった。それまで銭湯に行くことを面倒がってきた宗助が、御米に指摘されてすぐに銭湯へ向ったことや、安井がまだ付近にいる可能性も残っていたにも関わらず、坂井の家へ行ったことである。そして小六の件について、佐伯の叔母のところへ早く行った方が良くと言う御米の問いかけに対しても、これまでは言い訳をしないうちに行ってきた「(二十三)」と返事をしていく。しかし、その変化に対して、御米が驚いている様子がないことも注目すべきだろう。まるで御米は宗助のこの変化を予期出来ていたかのようにである。

上総朋子は、このような宗助の変化についてこのように

評価している。

宗助の参禅は明らかな成果は得られなかったが、参禅する中で、「門」は「敲いても駄目だ。独で開けて入れ」と言う声は聞こえてきた(二十一の二)。全て独りの力で対処しなくてはならないこと、そして観念では問題は解決していかず、問題は問い続けなければならないことを確認して、宗助は日常へ帰って来た。そのような宗助が、最終部において、以前とは違う姿を見せることは重要である。<sup>[25]</sup>

この評価に対して、「全て独りの力で対処しなくてはならない」というところには賛同し切れない。なぜなら「一つの有機体」として生きていくには、全て独りで解決しようとして参禅を選んだこと自体もそれに反していたからだ(「罪」や「罰」をきちんと受け止めて生きていくことから目を背けないためには、御米とそれらを共有しながら対処することが「一つの有機体」を維持するための条件なのだ。しかし後半にあるように、観念だけでは解決せず、問題一

一つに対処しながら生きていくしかないことは悟ったのである。それゆえに宗助の行動に変化が生じたのだ。そして、御米はすでに易者の言葉を告白した辺りから、その準備が出来ていた。参禅から帰って来た宗助と共に、再スタートを切るのだ。

宗助の周りに起ったリストラの問題についても、一段落した際に宗助は「生き残った自分の運命を顧りみて、当然の様に思った。又偶然の様に思」(二十三) って、「まあ助かった」(同)と御米に言うが、その嬉しそうでも悲しそうでもなさそうな様子に、御米は「天から落ちた滑稽」(同)のようだと感じている。宗助は自分の職がどうなるかということも天が下す判断に委ね、それを受け止めてから御米とどう対処するか考えるしかないと覚悟が出来ていたのであろう。その判決に従う様子が、御米にも「天から落ちた」ものに見えたのだ。

御米が「本当に難有いわね。漸くの事春になつて」(二十三)と話しかけたことに対して宗助は「うん、然し又じき冬になるよ」(同)と返している場面は、夫婦の関係の亀裂を表すものだ指摘する先行研究も多くあるが、宗助が春

のような華やかな季節のみでなく、寒く厳しい季節を迎える意識を強く持つていることは、「一つの有機体」のように生きていくことの覚悟を改めて確立させた証なのである。そのような「幸福」しかあり得ない野中夫妻にとつて、この覚悟こそが参禅のもたらした前進と言えるのだ。

#### 〔注〕

- 1 谷崎潤一郎「門」を評す。『新思潮』一九二〇・九。
- 2 江藤淳「門」——罪からの遁走』『夏目漱石』一九五六・一  
一、東京ライフ社。

- 3 西垣勤「門」『漱石と白樺派』一九九〇・六、有精堂。
- 4 前田愛「山の手の奥」『都市空間のなかの文学』一九八二・一  
二、筑摩書房。

- 5 中山和子『門』論——「一つの有機体」神話の隠蔽するもの』  
『漱石・女性・ジェンダー』二〇〇三・一二、翰林書房。

- 6 小宮豊隆『漱石の藝術』一九四二・一二、岩波書店。

- 7 正宗白鳥『夏目漱石論』『正宗白鳥全集 第二十卷』一九八三・  
一〇、福武書店。

- 8 柄谷行人『漱石論集成』一九九二・九、第三文明社。

9 例えば、佐藤裕子は『門』の主題形成とその宗教性——参禅

の意義と「父母未生以前本来の面目」(『日本文藝研究』第39巻、一九八六・四)において、宗助に与えられた「父母未生以前本来の面目」は何かという公案こそが作品の主題を支えているのだと述べている。また、松尾直昭は、「夏目漱石『門』論

——参禅の意味をめぐって——」(『日本文藝研究』第41巻、一九九〇・一)において、宗助は分別を頼りに生きる人物だとした上で、そういった宗助であるからこそ「父母未生以前」という意味がよく分からなかったのであり、逆に宗助は「日常の我」を参禅によって思わず呼び戻しているのだと指摘している。

10 前出『門』論——「一つの有機体」神話の隠蔽するもの『漱石・女性・ジェンダー』

11 山岡正和『門』論——解体される〈語り〉『日本文学論究』第6冊、二〇〇四・三。

12 片岡豊「和合同棲」のための〈男〉の条件——夏目漱石『門』の宗助——『作新国文』第11号、二〇〇三・一一。また、前田愛の指摘は『都市空間のなかの文学』(一九八二・一二、筑摩書房)に「山の手の奥」として収録されている。

13 前出「和合同棲」のための〈男〉の条件——夏目漱石『門』

の宗助——『作新国文』第11号。

14 赤井恵子・浅野洋編集『漱石作品論集成【第七巻】門』(一九九一・一〇、朝日精版印刷株式会社)内に収録されている『門』の研究史についての対談。

15 前出『漱石作品論集成【第七巻】門』。

16 岡庭昇「姦通の風景 漱石がさぐりあてたもの」『性的身体——「破調」と「歪み」の文学史をめぐって』二〇〇二・六、毎日新聞社。

17 朴裕河「漱石『門』論——子供不在が語るもの」『日語日文学研究』第57号(二〇〇六・二、韓国日語日文学會)において、宗助がこの散歩の末に買って帰るものが子供用の玩具「護謨風船の達磨」だったことについて「宗助がものを買わないのは、経済的能力の有無以前に「中へ這入ると必ず何か欲し」くなったりするのは宗助自身によって既に「一昔前の生活」と説明されるように、宗助の現在には欲望さえも希薄な無気力なものなのだから。そういう意味では、宗助が達磨の「風船」を買うのは明らかに、まだ存在しない「子供」への欲望の現れと見ていい」と述べている。

18 小林嘉宏は明治末年から大正期において「核家族化した」

家族・家庭生活社会階級が成立」（大正期「新中間階層」の家庭生活における「子供の教育」『日本家族史論集10 教育と扶養』、二〇〇三・二）したと述べており、「家庭」の概念は「子供の存在を前提としていると指摘している。

19 前出「漱石『門』論——子供不在が語るもの」『日語日文學研究』。

20 柳沢賢二「夏目漱石『門』論——宗助と子供に関連して

——」『専修国文』第95巻、二〇一四・九。

21 前出「夏目漱石『門』論——宗助と子供に関連して——」

『専修国文』第95巻。

22 『成功』については、見田宗介「『立身出世主義』の構造

『潮』十一月号（一九六七・一一、潮出版社）や竹内洋『日

本人の出世観』（一九七八・一、学文社）、雨田英一「近代日本

の青年と「成功」「学歴」——雑誌『成功』の「記者と読者」欄の

世界」〔学習院大学文学研究年報〕第35号、一九八八・三）等

で、雑誌発行当時の立身出世について論じる上でも触れられて

いるように、当時の立身出世を目指す青年たちを対象とした読

み物であったことが分かる。雨田氏はその中で、「立志成名興家

獲富という当時の丁立身出世」を志す者に対して鼓舞し激励す

る「良朋」として、また「成功」への道すじを照し導く「大燈臺」として位置づけていた」『成功』はそうした自己教育を援助し励ますものとしてその存在意義を主張していた」と述べている。

23 光田鮎美「夏目漱石『門』論——〈運命〉観への亀裂——」

『近代文学論集』第28巻、二〇〇二・一一。

24 前出「夏目漱石『門』論——〈運命〉観への亀裂——」『近

代文学論集』第28巻。

25 上総朋子「夏目漱石『門』論——宗助・御米の日常を中心

に——」『日本文芸研究』第54巻、二〇〇三・三。